

2014.8.25

二根字弱動詞の不思議さ

はじめに

●ヘブル語は動詞が中心となっている言語です。しかも、ヘブル語の動詞は三つの文字(子音)からなる語根からなっており、語根はそれぞれ基本的な意味を持っています。それは漢字の形そのものが意味を伝えるのと同様です。ヘブル語では、ひとつの単語を形成するために語根のまわりを補う文字が他の語を構成するためにさまざまな形に変化しますが、基本的な意味は、何らかの形で必ずすべての単語の中に残ります。

●たとえば、ヘブル語のあいさつ用語であるシャーローム(שלום)の語根は、「シン」(ש)－「ラーメド」(ל)－「メーム」(מ)からなり、英語の表記では Sh-L-M となりますが、その基本概念は「平和」「健全」「完全」「繁栄」です。この語根から多くのことばが組み立てられます。「シャーレーム」שלום という動詞は、終る、完成する、繁栄する、ささげる、誓いや義務を果たす、支払う、償う、平和を保つ、無償である、といった意味があります。形容詞も同じ表記ですが、「自然のままの、完全な、平和な」という意味になります。名詞の「シエレム」שלוםは「和解のいけにえ」(fellowship offer)を意味します。メルキゼデクのいた地名としての「サレム」は動詞と同じくשלוםと表記されます。

●ところで、動詞の語根が三つの子音からなる基本形は3人称単数男性の完了形が用いられます。ところが、קוםやביןやבואのように、第二根字が母音をあらわす「ヴァヴ」(ו)や「ヨード」(י)のついた動詞では、3人称の単数男性完了形は、בן, קםで、「ヴァヴ」(ו)や「ヨード」(י)は脱落します。このような動詞を二根字弱動詞と呼びます。それゆえ、名尾耕作『ヘブル語大辞典』では、下記のように〔 〕付きで記されています。

〔שוב〕 Qal 帰る, 立ち帰る, 去る. 〔完〕[3単]

●三文字の語根で構成されている動詞を強動詞と呼ぶのに対して、語根では表記されても、変化の途中で消滅してしまう「アーレフ」(א)、「ヴァヴ」(ו)、「ヨード」(י)、「ヌーン」(נ)、「ヘー」(ה)の文字を語根の中に含んでいる動詞を弱動詞、あるいは、二根字弱動詞と呼びます。第一回目の「ヘブル・ミドウラーシュ」では、この二根字弱動詞との出会いとその不思議さについて取り上げたいと思います。

●ちなみに、「シューヴ」(שוב)、「ブーン」(בין)、「シール」(שיר)、「ムート」(מות)、「ポーシュ」(בוש)はみな同様に、【二根字弱動詞】です。また、「サーヴァヴ」(שבב)のように、第2根字と第3根字が同一な動詞も【二根字弱動詞】と見なされます。

1. 二根字弱動詞との出会い

●2010年の夏、日本神の教会連盟の修養会で「霊性の回復セミナー」が持たれました。その時の瞑想に用いたテキストは詩篇23篇でした。各自、その詩篇を瞑想してもらった後に、それをグループの中で分かち合いをしてもらい、その後で、私とその詩篇についての瞑想のポイントを説明する時が与えられました。「主は私の

HEBREW MIDRASH No.1

羊飼いで始まる詩篇 23 篇の結論は、最後の 6 節の結びのフレーズにあります。

【新改訳改訂第 3 版】

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来ましょう。

私は、いつまでも、【主】の家に住まいましよう。

【口語訳】

わたしの生きているかぎりは／必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。

わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

【新共同訳】

命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。

【NKJV】

Surely goodness and mercy shall follow me All the days of my life;

And I will dwell in the house of the Lord Forever.

【NIV】

Surely goodness and love will follow me / all the days of my life, /

and I will dwell in the house of the LORD / forever.

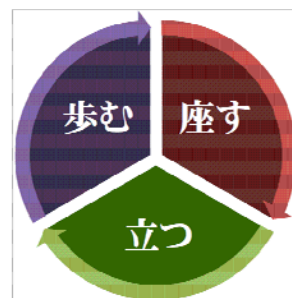
●多くの聖書が、「私は・・・主の家に住む」、英語だと I will dwell と訳しています。ところが、新共同訳だけは他とは異なった訳をしています。私はこの訳に少々驚きました。「なぜこんな訳になるのか。」と。原文では動詞は一つです。新改訳では「住まいましよう」と訳されていますが、新共同訳ではあたかも二つの動詞があるかのように訳されているのです。つまり、一つは「帰り」と、もう一つは「とどまるであろう」です。

●ミルトス社出版の「ヘブライ語聖書対訳シリーズ」の「詩篇 1」の脚注には、「ヴェシャヴティ」(וְשָׁבְתִי)の語根に二つの説があるとし、一つが「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)、そしてもう一つは「シューヴ」(שׁוּב)と解説されていました。当時の私は、新共同訳は欲張って二つの意味を合わせて訳している、いわば「ズル訳」だと思っていました。しかしそれから 3 年後、共通の語根はある種の関連する意味が隠されていることを知るようになりました。

●新共同訳は、共通の語根を持つ二つの動詞である「シューヴ」と「ヤーシャヴ」を合わせて訳していますが、その二つの動詞は、ある種のプロセス、あるいはストーリー性を感じさせます。つまり、主の家に住むその前に、その「住む」主体がそこに帰るという前提があります。主に「帰る」⇒主の家に「**住む(とどまる)**」、しかも、いつまでも、そして生涯です。

●みことばの瞑想において、「住む」「とどまる」「座す」ということはきわめて重要です。今日の教会において、クリスチャンのライフスタイルにおいて、最も疎かにされている部分が「座す」という部分です。イエシュアも「わたしが父にとどまっているように、あなたがたもわたしにとどまりなさい。」と語っておられます。この「とどまる」ということばのギリシア語は「メノー」(μένω)という言葉ですが、ヘブル語では「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)です。

●話が、少々脱線しましたが、詩篇 23 篇 6 節における新共同訳との出会いは、【二根字弱動詞】との出会いです。つまり、共通の語根を持つ語彙は、なんらかのストーリー性を持ってかかわっていることを知るように



なりました。

2. 語根【נש】の周辺の語彙

●語根が**נש**であるならば、そこからいくつかの語彙群が考えられます。一つ目の動詞の「虜にする」の「シャーヴァー」(**נִשְׁבָּה**)、その受動態の「虜にされる」の「ニシュバー」(**נִשְׁבָּה**)、そしてその名詞「虜」の「シェヴィー」(**שִׁבְיָ**)。二つ目の動詞の「帰る」の「シューヴ」(**שׁוּב**)だとすれば、捕らわれ人を帰らせて、神とのかかわりを回復することと関係してきます。神に帰ることで捕らわれの状態から解放されます。そ



して、はじめて三つ目の動詞である「住む、とどまる、座る」の「ヤーシャヴ」(**יָשַׁב**)が可能となり、神と人とのかかわりが回復します。しかしこのことが実現するためには、その背景に四つ目の動詞である「ナーシャヴ」(**נָשַׁב**)が必要です。この「ナーシャヴ」は詩篇 147 篇 18 節に「主が・・・、ご自分の風を吹かせると、(水を溶かして)水は流れる」とあるように、主の主権的な力を示唆しています。そして、五つ目は神との親しい愛の交わりを豊かに味わい続けるという意味での、水を「汲む」の「シャーアヴ」(**שָׁאַב**)ということが考えられます。特に最後の「シャーアヴ」は、イザヤ書 12 章 3 節の「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む」という比喩的表現による終末のメシア的祝福を表わしています。「救いの泉」とは主こそ生ける水の源であることの表現であり(エレミヤ書 2:13/17:13)、神の祝福が無尽蔵に蓄えられていることを意味しています。その泉から水を「汲む」ことが「シャーアヴ」(**שָׁאַב**)です。これらはすべてが親語根である**נש**とつながっているのです。

●ちなみに、このイザヤ書 12 章 3 節の歌は仮庵の祭りと関係しています。祭りの最後の日に、かつて神がイスラエルの民を荒野において助けて下さったことを感謝し記念するために、シロアムの泉から水を汲み上げて、神殿に運び、その水を注ぐという儀式がなされていたようです。つまり、シロアムの泉から水を汲んで神殿まで行く途中で、イザヤ書 12 章を歌いながら行列が進んだと言われています。それは、仮庵の祭りの中でも、最後をかざる最高潮の喜びの時でした。しかし、イエシュアが立ち上がって語られたのは、その祭りの終わりの時でした(ヨハネ 7 章 37~39 節)。この歌が真の意味で実現(成就)するのが、仮庵の祭りの頃にメシアが地上再臨してからのことです。そのとき、尽きることのない主の救いの喜びを味わうことができるのです。「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む」とはそのことを意味しています。

●二根字弱動詞の場合、親語根(parent root)に子語根(child root)を加えて三根字にします。しかし、親語根(parent root)である**נש**の秘密は、語根の文字自体にも秘められています。最初の「シン」(**ש**)の文字は「歯」を意味し、そこから「食い尽くす」、「(神を)食い尽くす」、「熱心に神を尋ね求める」という意味に広がって行きます。と同時に、その次に来る「ベート」(**ב**)の文字は「子」を意味します。つまり、神の御子イエシュアを熱心に尋ね求めることによって実現する神の事柄、その事柄の親語根としての【**נש**】であるとも理解できるのです。

3. 親語根(parent root) 【נש】のさらなる秘密

●大祭司が身に着ける装束である「エポデ」には 12 の宝石が縫い込まれています。その中の八番目の宝石が



「めのう」です。ヘブル語は「シェヴォー」(שֶׁבוּ)です。なにゆえに、「シェヴォー」(שֶׁבוּ)なのでしょう。それはその宝石に刻まれた部族の名前と深く関係しています。

●「めのう」に刻まれた部族の名前は「マナセ」です。「マナセ」(מְנַשֶּׁה、正確には「メナッセー」)という名前は「神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた」という意味です。名前の語根としては、「忘れる」を意味する「ナーシャー」(נָשָׂה)に、それを名詞化する「メーム」(מ)が接頭辞として付けられて「マナセ」となっています。「ナーシャー」(נָשָׂה)それ自体は、創世記 41 章 51 節で「忘れさせる」という意味で、強意形のピエル態で使われています。

●「忘れる」を意味する語彙としては、例えば、ヨセフのことを忘れた献酌官長の場合(創世記 40:23)には「シャーカハ」(שָׁחַח)が使われています。こちらの方が一般的で、旧約では 120 回の頻度で使われています。ヨセフのこれまでの生涯を振り返るならば、運で言うならばアップダウンを繰り返しています。子どもが生まれた時が人生の最も祝福された時とヨセフは感じていたようです。しかし、ヨセフの良い時にも悪い時にも、いつでも「主はヨセフとともにおられた」のです。その歩みを貫いているのは神のご計画であり、すべての出来事が一本の線につながっているということです。

●マナセの兄はエフライムです。エフライムの名前の意味は「豊かな実り」ですが、マナセの名前の意味は「忘却、忘れ去ること」です。本筋としては、「実り豊かな」人生を送るためには、「忘却」が必要なのです。「忘却、人の罪を赦すこと」が先で、そのあとに「実り豊かな」人生が約束されているのです。

●「マナセ」という名前の中に、ヨセフはこれまでの自分の経験した苦しみの中に、自分の父のことや兄弟たちにされたことを忘れさせるほどの、帳消しにするほどの、神の臨在の祝福とご計画を見出したことを示しています。自分が受けた苦しみを凌ぐほどの神のご計画という摂理がそこにあったことを受け止めたことを意味しています。

●マナセは私たちの罪を十字架においてすべて忘れて下さったキリストの型です。キリストはその十字架の上で、「父よ。彼らをお赦しください。」と祈られました。神の「赦し」は「忘却」と同義です。それは神の記憶から消されることです。それゆえ、古いものはすべて過ぎ去って、すべてが神の御前において新しくされています。私たちはいつも「真のマナセである方」を絶えず見つめながら、そのご性質にあずかる必要があります。

●詩篇 45 篇 10~11 節には、王の妻となる花嫁に対して、自分の民と自分の父を忘れるように勧めています。

娘よ。聞け。心して、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。

そうすれば王は、あなたの美を慕おう。

彼はあなたの夫であるから、彼の前にひれ伏せ。

花嫁は肉親の愛にも勝る花婿に対する愛が求められています。王である御子イエシュアの花嫁としてふさわしく生きるためには、まず、花嫁が花婿である方の声に耳を傾けて聞くこと。その方の声で心を満たすことです。そうすることで、花嫁ははじめて花婿のご性質を帯びるようになるのです。私たちがキリストの花嫁として、花婿の声を聞くことに専心しなければなりません。終わりの日は近づいています。それゆえ今日、花嫁の霊性の回復として、「シューヴ」(שׁוּב)と「ヤーシャヴ」(יָשׁוּב)がよりいっそう求められているのではないかと思います。

H.Meigata